

十 簡易生活の妙味

職業に熱中すると云ふことは、同時に人の心を清くするものであります。同じ職業でも農業は特に面白くと思ふ。根が正直なる天地を相手にしての仕事ゆゑ、萬事當はづれがない。若しあるならば、此方こそ手落である。此の意味に於て俳諧寺一茶の『勸農詩』は頗る振つてゐる。強ち農業に限らず、此心掛で仕事大事にさへやつて行けば、天下面白からぬはなく、簡易生活の妙味、味ひ盡せぬ程であります。さあ之を聞くがよい。

風流を楽しむ花園ならで、後の畑、前の田の作物に志し、自ら鋤を把つて耕し、先祖の賜物と命の親に懇を盡し、吉野の櫻、更科の月よりも、己が業こそ樂けれ。

世の中の職を營む人は、恚うもなくはならぬ。仕事そのものが、既に骨休めをする遊びであつて、仕事の外に遊びを求むるの必要なく、吉野・更科と、花や月を求むる代りに、自ら鋤を把つて耕す方がどんなに樂いか、という風にならなくては駄目だ。こゝで鋤は、強ち農具に限らず、總ての仕事道具と見たらよい。さてその譯は、

朝夕打ち向ふ菜種の花は、井出の山吹よりも好もしく、麥の穂の色は、牡丹芍薬よりも腹ごたへあるかと覺ゆ。

七重八重花は咲いても實のない山吹よりも、一重に咲く菜種の方が、どんなに實があるか役に立つか。麥の穂の色は無粋な率直なのは、虚榮虚飾にゆらくした牡丹芍薬より、どんなに腹ごたへがあるか。何でも物は腹に答へのある位でなくてはならぬ。

朝顔より夕顔こそよけれ

これは朝寝坊をせよといふのではない。朝顔がなくては朝起きが出来ぬとい

ふ様ではお話にならぬ。露の干ぬ間の朝顔を愛するよりも、容器ともなり乾瓢ともなる夕顔の方が實益だと、いふのである。

萩菊よりも芋牛蒡に味あり。すべて花紅葉より栗柿は實の木なり。

華を去り實に就けとは眞にこれか。

稻の穂波の賑はしく、藁の前より腹滿つる心地して、粟穂になるゝ鶉より

野邊の虫の音聞くが面白く。

秋の收穫時期になつて、田の面に黄金の波打つ有様は何とも云へぬ。お腹の滿つる心地がすると同時に、ほくくで懷中もふくれて来る。米のなる木は同時に金の成る木である。態々木の片や糸の切れをこすつて、八釜しい音をさせずとも、天然の自然の虫の音を聞くのが、どんなに面白いか。

遠き名所舊跡より、近き田圃の見廻りが飽かず、松島鹽釜の美景より、飯釜の下肝要なり。

兎角、近い田圃の見廻りを嫌つて、飯釜の下をお留守にして、其處よ此處よと遊びまはるものだから、米の成る木は枯れてしまひ、飯釜の下は空虚になつて、口を鈎にひつかけるか、人の物に手を出すか、どちらかにせねばならぬことになる。飯釜の下が何よりも肝要だ。

上作の名劔より、鋤釜は調法なり。書畫の掛物より、かけてみる作物の肥を油斷せず。

如何にも鋤釜は調法なもの。書畫骨董をかけて喜ぶより、作物に肥をかけることを忘れてはならぬ。何でも肥が大切ぢや。詩を作るより田を作れ。

投入の立花より、茄子大角豆の正風なるが見所多く、茶の湯蹴鞠の遊びより、澁茶を飲んで昔語こそおかしけれ。

上茶のでがらしより、番茶の出ばなが、どんなに甘しいか。蹴鞠の遊びして

足を挫かうより、お臍に茶をわかして、昔物語に大笑ひするが、どんなに面白いか。「家内中調子そろへて大笑ひ、これ天然の音楽の聲」。

玉の臺より藁屋の家居が心やすく、高きに居らねば落つるあぶなげなく。寢て居る人に倒れる氣遣ひはなく、金殿玉樓の高い處に居なければ、落ちる心配はない。落ちた處で藁屋であつたら大したこともない。

念佛のかはりに業を怠らず、實義を盡すは神詣でに比し。

朝から晩まで咽喉を痛めて作り聲して、大汗になつて念佛した處で、強ち救はれるのではない。念佛の眞意を得、佛の御心を胸に頂けば、仕事する其間から念佛は獨り手に出て來る。いくら拍手打つた處で心が誠でなかつたならそれは神を欺くのであつて、罰こそ當れ御加護はない。それよりかも、一心不亂に業を勵み實義を盡すのが、何れ程神佛の御心に叶ふか知れぬ。一茶は他力念佛の行者であつた。其事は彼の『安心決定の文』によつて知られる。

仁者にならうて山に木を植ゑ、知者の心をくんで田の水加減を専らにし。

仁者は山を樂み知者は水を樂むとかや。仁者知者の精神は、茲に期せずして自ら行はれる。

珍肴鮮魚の料理より、錢入らずの雑炊が、後腹痛める氣遣ひなし。

家の細君が心こめての手料理に飽き足らず、落ちたら怪我する高い二階三階に上つて、左右に女前に酒で、ドンチャンく騒いで居る時は、面白からう嬉しからうが、四日も五日も十日も二十日も續けられるものでもあるまい。よし續けられた處で、さて勘定おあいさうと、書付一つ突出された時は、蒼い顔せねばならぬ。蒼い顔だけで濟めばよいが、出るの入るの質の八のと、新しい大立廻りをした上が、馬の牛のと厄介な者がついてまはる、ろくな事はない。彼の大村益次郎先生は、弟子と共に郭を通り抜ける際「あれは何の音

か」と問はれる。弟子は正直に「あれは三味線の音です」と答ふれば、先生「俺にはあれが金の逃げる音に聞える」と云はれたさうだが、我輩は一層深刻に將た痛切に「あれは高い塀の中に、自由を奪はれに行く足音ぢや」と云ひたのである、如何にも大きに後腹が病めるでないか。人間は雑炊腹を鼓打つて満足が出来れば、平穩無事だ。

總べて世の中は飛鳥川の流れ、昨日の淵は今日の瀬となるが如し。唐の咸陽宮萬里の長城も終には亡び、平相國の驕りも一世のみ。鎌倉の將軍も三代を過ぎず、北條足利の武威盡き、織田豊臣の榮も一代なり。時過ぎ世變れば誠に夢の如し。世に稀なる珍味も舌の上にあるうち、伽羅蘭麝の薰りも嗅ぐうちのみ。樂は苦の基、財寶は後世の障、遊興は暫時の夢。他の富も羨まず、身の貧も歎かず。唯謹むべきは貪欲、恐るべきは奢りなり。貪欲と虚榮、これは正しく身を亡ぼす基である。謹むべく且つ恐るべきもの。抑も田地は萬物の根元にして、國家の至寶なれば、父母の如く敬ひ、主君の如く尊み、妻子の如く育しみ、寸地をも捨てず、何處にでも鋤先の天下泰平、五穀成就を祈らぬはなし。

今年米親といふ字を拜みけり。

一茶

恚うあつてこそ世の中は眞に面白い。



何のその百萬石も笹の露

一茶

やれ打つな蠅が手をする足をする

同

瘦蛙まけるな一茶こゝにあり

同

勿體なや晝寢して聞く田植歌

同

阿彌陀佛の土産に歳を拾ふ哉

同

かたつぶりそろくのぼ登れ富士ふじの山やま

同